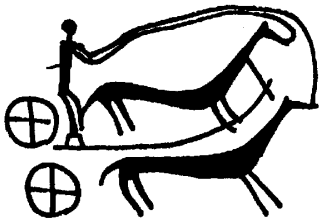
No. 21 *December* 1998

センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education
北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 21



特集：教育ワークショップ（FD）
「21 世紀における北海道大学の教育像をめざして」 3
全学教育委員会開催される 10
平成 11 年度総合講義及び一般教育演習開講数 12
平成 11 年度全学教育部行事予定表 13
OB 産業界リーダーによる特別シンポジウム 14

巻頭言 FOREWORD

学部教育を考える－学習のフィールドを考えよう－

農学部教授　清水　弘

先日のテレビ画面で，倉本聰氏が自ら主宰している塾の若者に「あなたの生活必需品を挙げなさい」という質問をしていたが，最も多かったのは「水」，次いで，「マッチなどの火をつけるもの」，「食料品」等々であった（11 月 27 日「ニュースステーション」）。また，（別の番組かもしれないが），同様の質問を東京の街中でインタビューしたところ，「お金」，「携帯電話」等々であった。自然環境に恵まれた富良野と，物質面で恵まれた東京という極端に異なる環境の中とで，考えること，発想する事柄が大きく異なることに驚いた。人の感性，才能はその時の雰囲気，状況によって反応の仕組みに違いがあり，教育においても，学生の理解や発想に同様なことが言えると思う。

最近，大学審議会から「21 世紀の大学像と今後の改革方策について」の答申が出された。学部教育の基本理念として，「主体的に変化に対応し，自ら将来の課題を探求し，その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探求能力）の育成を掲げている。また理念実現のため，教育方法等の具体的改善面として責任ある授業設計とその実施，成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施等が提言されている。

多様な学生の大学への受け入れに対応し，エリート教育からマス教育，注入型から学生参加型の学習

へと転換が要望される中，具体的な教育方策を見出せず戸惑いを感じているのがわれわれの実態である。わが国の大学教官は，一般に研究活動には熱心であるが教育への関心は少ないと云われているが，その一つの理由は，研究と教育の方法論は全く別と考えている傾向が強くあるためではないだろうか。

研究をすること（教官）と自ら学ぶこと（学生）とは基本的に同じプロセスである。研究においては自ら課題を設定し，その課題を解決しなければならない。教育においては学生が自らその能力を習得しなければならないのであり，同一のプロセスが適用できるであろう。自ら主体性を持って学ぶ学習において，まず課題を設定し，課題を解決したり自然・社会現象を科学的に分析し正しい知識を習得したりしようとするとき，３つのステップを踏むことになろう：?現在持っている知識・情報で合理的・科学的に考えることを試みる，?必要な知識・情報を，本をはじめ様々なメディアを利用し或いは専門家から収集する，?類似した現場を訪問したり，時には実験等で再現を試み理解を深める。?～?のステップを通して新たな知的レベルに達し，目的達成まで繰り返される。このことは研究についても同様である。この過程で新たな知識の習得，発見の喜びを体験し，自らの隠れた才能に気づき，更なる学習の意欲へと繋がる。この実現が教育の一つの理想像と私は考えている。

喜びは人により様々であり，自ら得たものである。教育において指導者，教官はそれを支援する立場にある。講義等のいわゆる注入型の教育は上記の?に位置づけられるものであり，教育の全てではない。教育方法の改善として，教育内容・方法，視聴覚機器や新たなメディアの活用等が指摘されているが，もっと積極的に教室の構造をも含め，教育目的に応じた最適な学習フィールドの設定について考える必要があろう。特に教養科目については，多様な学習フィールドを想定することにより教育内容・方法の広がりが更に期待される。

昨年，総長裁量経費の財政援助を受けて，１年生を対象として農学部附属演習林と牧場を利用した「フレッシュマン教育」に関わった。その内容等については，実質的な企画・実施に携わってくださった農学部大久保正彦教授並びに近藤誠司助教授がセンターニュース（15 号，17 号）に述べられている。この企画は，両施設の教官・技官に加えて，畜産，森林科学科，農学部，高等教育機能開発総合センターその他の学内関係教官多数の協力を得て実施された。所期の目的を充分に達成できたことの最も大きな要因は，?広い分野の先生の参加を得て，討論し，企画・実施したこと，?札幌から遠隔にある演習林（幌加内町）と牧場（静内町）で実施したこと；即ち，研究会方式で企画・実施したこと，並びに学習フィールドに恵まれていたことにあると思う。

教育方法の改善は個々の担当教官の責任と判断に任せる雰囲気が強いが，個人の能力には限界があり，特に実行となると何もできないのが実態であることを私自身の体験から強く感じている。上述のように，「フレッシュマン教育」の企画・実施にあたっては，幅広い専門分野の先生方の協力を頂いて数度の研究会で検討し，特に高等教育開発研究部の先生の指導で「グループ学習」をとり入れたことが，この企画の成功に大きく寄与している。

大学審議会から指摘されるまでもなく，自己点検評価の趣旨から，教育方法の改善には不断の努力が必要である。しかも，現在抱えている学部教育の個々の課題は，それぞれの専門分野の研究と同様に研究の対象となるものであろう。さらに個々の担当教官の問題としてではなく，学科，学部，大学の共通の問題として捉え，基本となる教育目標についての合意を形成し，教官の共通の認識のもとで，教育内容・方法等は検討会や研究会等への自主的参加を通して，教官独自が努力することによって，教育の資質の向上が達成されると考える。

高等教育　HIGHER EDUCATION

特集：教育ワークショップ(FD)「21世紀における北海道大学の教育像をめざして」

ワークショップを終えて

高等教育開発研究部長・医学部教授　阿部　和厚

北海道大学のファカルティ・ディベロップメント（FD）「21 世紀における北海道大学の教育像をめざして」が無事に終了しました。総長とタスクフォース６名，各部局から 37 名，他大学から２名の総勢 46 名，そのうち 45 名は泊まりこんでの１泊２日の画期的な会となりました。

参加者の推薦は各部局長にお願いしました。「学部長の指名なので」「教務委員なので」という参加者が約３分の１，「せっかく参加するなら何かを得よう」という参加者が約３分の１，「積極的姿勢」の参加者が約３分の１でした。37 人の侍による真剣で活発な作業と討論が密度濃く展開され，さすが総合大学と感激しました。まず，この素晴らしい方々を送ってくださいました各部局長に感謝いたします。

この FD の企画は，最初に高等教育開発研究委員会に提案して議論をいただき，さらに総長補佐会でも内容を討議し，北大の将来がかかっているとの認識のもとに丹保総長，中村副学長の支援を受けて開催できるようになったものです。

わたくしは平成４年に大学の点検評価委員会に加わり，本年で７年目になります。点検評価の最初の年度は教育の点検を担当し，評価する目標を明確に表現することを目指しました。また，教育の基本を共通に認識するための教官研修の必要性も討論しました。その後の点検評価委員会で，「学生による授業評価」「教官のレスポンス調査」などにおいて，教官研修の必要性を取り上げてきました。平成７年の教官に対するアンケート調査では，「大学として教官研修を行った場合参加するかどうか」との問いに，参加する 40 %，参加しない 16 %，どちらでもない 38 %という回答を得ました。これで FD が可能という感触を得ました。さらに，平成８年には教育業績評価法をまとめ，「評価を行うにはその評価の根拠を理解するための教官教育研修が必要である」という再提起を行いました。平成９年の「成績評価について」の調査では，成績評価の課題解決の短期的方策に，１）FD を行うこと，２）シラバスの在り方の検討と合意形成，３）成績評価基準の明確化，などが提案されました。これら

会場の真駒内ハイツ北海道青少年会館入口での記念撮影

は本年のFD実施の布石であり，それが実施された時点で，２），３）も解決されることになります。

また「成績評価について」の調査では，問題解決方策の長期的展望に「教育業績評価の実施」があげられています。今回のFDでは教育について真剣に討議され，教育業績評価の必要性も認識されました。「教育業績評価」については，本年度の点検評価委員会でさらに検討をすすめ，来年度には実施する運びとなっています。７年前から構想し，少しづつ前進してきたFDと教育業績評価が実現の方向へと向かっています。教官研修と教育業績評価は対になっていることを強調したい思います。

今回のFDの到達目標に，１）教育を構成する要素の理解，２）授業設計，３）シラバスの記述の理解，４）学生参加型授業法の理解などがあります。このFDは，学生参加型授業と同じように設計されています。40 人のクラスを各々７，８人からなる５グループに分けて，グループ研究をする形で進めます。各テーマにそって，はじめはゆっくりと考えていただき，夜の懇談会が終わってから少し難しい内容のものをつくる作業をしながら，だんだん集中できるよう企画しました。

今回の研修方法と内容は，米国や英国の教官研修法に学んで日本の様々な大学で 25 年ほど前から実施され，効果をあげてきたものです。しかし，FD の必要性が注目されてたのはこの２，３年のことです。総合大学，とくに国立の中心的大学では，今回紹介したような内容はまだほとんど知られていません。これは教育学研究の実践的な部分をとりいれながら発展してきたものです。この実践的な部分がさまざまな分野にひろがってきたのも，ごく最近のことです。目標設定，目標を達成するための方法，成果の評価は，たとえば最近の大学審議会答申「21 世紀の大学像と今後の改革方策について」でも基調となっています。

グループ討論による作業

全学レベルのFDの内容の設計について，教育の問題，教授法の問題は分野によって異なるという意見があります。今回は全ての分野に共通の教育の基盤をとりあげ，しかも全学教育の視点でまとめることにしました。また，授業設計も環境というテーマで全体を統合することにしました。周到な内容設計に対しては，枠のつくりすぎ，内容がせまい，また，時間を限ってのグループ作業は時間が足りない，という批判が出るであろうということは，あらかじめ承知していました。内容がそのまま受け入れられるとは思っていません。しかし，多くの方々と教育という共通の土俵で２日間をすごすことができたことは有意義だったと思います。教育をめぐる様々な現実の問題，教育の方法，教育の目標とは何か，研修の方法，成績評価の基準化，教育評価などの議論が生産的に行われることを願います。各参加者の今後の発展を期待します。

最後に，このご多忙の時期に参加して下さいましたみなさん，総合大学における多様な資質を発揮し，立派なプロダクトを生み出して下さいました参加者各位に敬意を表し，お礼を申しあげます。そして，事務的な支援をいただきました教務課の方々，各タスクフォースのみなさんにもお礼を申しあげます。

ワークショップの記録

会場：真駒内ハイツ北海道青少年会館

日時：平成10年11月27・28日

プロデューサー：総長　丹保憲仁

タスクフォース：高等教育開発研究部教官：阿部和厚（ディレクター），小笠原正明，西森敏之，細川敏幸；生涯学習計画研究部教官：木村純，医学部附属病院教官：大滝純司

参加者：本学　37　名（ほとんどすべての部局を網羅），他大学等からの参加者２名，合計45名

＜日録＞

●11月27日午前

8：30　北大学術交流会館前集合

9：00　バス出発（交通渋滞により15分遅れ）

9：35　会場到着・記念撮影

9：45　総長挨拶

39　名を５グループにわけて以下のようなグループ作業を行い，発表・討論をくりかえした。グループ作業に先立って，タスクフォースによる　30分程度のミニレクチャーがあった。グループ作業のテーマ（以下のワークショップのテーマ）はそれぞれお互いに関連するが異なるものとした。各参加者は，このFDの目標，１）教育の構成要素の理解，２）授業設計法の理解，３）シラバスの表現法の理解，４）学生参加型授業法の体得，５）FDの進め方を体得することであった。

アイスブレーキング

初対面同士が多い場合に，気持ちをときほぐしてコミュニケーションできる状況を設定すること。グループ作業によるブレイン・ストーミングの競争

ミニレクチャー：「大学の社会的位置づけ」

ワークショップ１：「大学教育における問題点とニーズの解析」

１）「社会は教養教育に何を求めますか」

２）「社会は理系卒業生に何を求めますか」

３）「社会は文系卒業生に何を求めますか」

４）「社会は大学で学ぶ側に何を求めますか」

５）「社会は大学で教える側に何を求めますか」

KJ法を用いた。

グループ作業：40分

４分発表，３分討論

● 11月17日午後

ミニレクチャー：「様々な教授法の説明」

ワークショップ２：「様々な授業法の利点と欠点・欠点の解決」

１）大人数講義

２）一般教育演習

３）小グループ学習・学生中心方式

４）メディア利用教育（ビデオ・マルチメディア）

５）論文指導

グループ作業：55分

６分発表，４分討論

ミニレクチャー：「ディベート」

ディベート体験

テーマ：大学の授業では出席を取るべきである

肯定と否定，50分

２グループ肯定側，２グループ否定側，１グループ審判とし，20分ほどの事前討論ののち，代表選出を出してディベートを行った。

夕食

ミニレクチャーとビデオ：「学生参加型授業の実例」

懇談会：各分野の壁をこえて共通の話題である教育の問題が話し合われた。

●11月28日午前

8：30

ミニレクチャー：「授業設計―目標の表現とその意味」

ワークショップ３：「授業設計１：目標の設定と表現」

教養教育で環境をテーマに分野横断型（複数分野で担当）の授業を想定し，以下の形式で展開する場合の授業を設計した。２単位授業　(90分授業15回）で設計した。

授業に科目題名をつけ，目標を表現した。

１）大人数講義講演型

２）一般教育演習

３）小グループ学習・学生中心方式
４）メディア利用教育（ビデオ・マルチメディア）
５）大人数講義 学生参加型
　グループ作業：60 分
　５分発表，５分討論
ミニレクチャー：「授業の内容（方略）の設計，評価」
●11 月 28 日午後
ミニレクチャー：「シラバスの表現」

ワークショップ４：「授業設計２：方略と成績評価の表現」
　WS３ について方略，成績評価をいれてシラバスを完成させる。
１）大人数講義講演型
２）一般教育演習
３）小グループ学習・学生中心方式
４）メディア利用教育（ビデオ・マルチメディア）
５）大人数講義 学生参加型
　グループ作業　70 分
　10 分発表，10 分討論

　各グループ作業では，参加者は毎回異なる役割分担（リーダー，発表者，発表資料（ＯＨＰ）作成係，提出記録記載係等）をした。テーマを指定時間内に討論してまとめ，発表 OHP，提出用記録（ワークショップのプロダクト）を用意し，全体発表討論に臨んだ。
　参加者はグループ作業では時間に追われ，忙しい，時間が足りないとの印象を持ったが，一方，全員が能動的参加をすることになり，研修としては効果的，効率的であった。
　一方通行の講演型の研修と参加型の研修の差は明瞭である。これは，注入型講義と比べて異なる学生参加型授業を体験することにもなった。
　最後に，参加者全員がこの FD についての意見を述べる機会を持った。多様な分野の教官が集まったことで，多様な意見が出されされ有意義であった。
6：00 終了
6：40 北大到着

（記録者：阿部和厚）

参加者の感想

横断的なコミュニティーの形成

スラブ研究センター教授　　林　忠行

　５ヶ月の在外研修を終えて11　月はじめに帰国すると，同僚全会一致の推薦で私のワークショップ参加が決まっていた。そうした事情で趣旨などもよく飲み込めないまま私は一泊の教育研修を受けることになった。
　二日間の研修で得るところは少なくなかった。研修はよく準備されており，阿部さん（研修では「先生」という敬称は使わない約束だったのでここでもそうする）をはじめとする「タスクフォース」の皆さんの意図するところも明快で，このワークショップ自身がひとつのモデル授業となっていた。その上で感想をいくつか述べることにする。
　大学の大衆化にともなう問題が深刻であること，そこから米国の経験を取り入れた改善策の検討が必要であることは理解できる。しかし，それは方法のひとつにすぎない。設定されたプログラムにしたがってシラバス作成方法を学ぶことに追われ，その方法の持つ思想的な問題などを議論する時間があまりにも短すぎたと思われる。
　阿部さんの授業をビデオで見たり，小笠原さんのシラバスの例示は有益だった。北大にはなお多くの優れた授業経験が蓄積されているはずである。もっとそうした内側の経験を再評価する視点もあっていいと思われる。
　最後に，教育という具体的な課題で部局を越え

た教官が共同の作業を行ったり，討論を行うという場は貴重である。部局横断的な教官のコミュニティーの形成という発想には共感を覚える。そうした意味で，この試みがこれからも発展することを期待したい。

教育方法に違和感

文学部教授　赤司　道和

文学部三教官にとって有益であったのは，講義・演習の様々な形態と，カリキュラム・シラバス作成の綿密な要領を知りえた点にある。また，学部の枠を越えた多様な専門領域の教官との忌憚のない意見の交換は，学ぶところが多く，おおきな喜びでもあった。

しかし一方で，提起された教育方法に関しては，違和感を覚えざるをえない面もある。例えば「授業設計」では，授業の各段階と最終到達点において，客観的に識別できる目標の設定が求められたが，これは容易ではない。文学部のような人間そのものの営為を対象とする学問の教育は，必ずしも知識の段階的修得に帰結しえないのである。同じ「源氏物語」の講義に出席していて，２年生は２年生なりに，４年生はその力量に応じてより深く学習するということもある。この問題は成績の評価基準にも関連するが，省略する。

最後に「ディベート」の教育上の効果に関して。自己の価値観や倫理観をいっさい前提とせず，ただ相手を論破することのみを目的とする議論は，益より害が多いであろうと思われる。

内容に批判的検討を

教育学部助教授　大野　栄三

学部横断的に教官が集まり，大学教育について意見交換ができたということは大きな収穫であった。おそらく他の参加者の多くも同じ感想ではなかろうか。このような交流の場を持つという意味では，本ワークショップを継続して実施しても良いと考える。しかしながら，その内容には不満がある。北大における実践の掘り起こしがなかった。旧教養時代から続く貴重な実践があるはずである。主催者側の用意した内容は米国大学教育（主に医学教育）の輸入普及であった。もしも，医学教育を専門職業教育と見なせるのならば，当日に紹介された教授法もある一定の成果が見込めるのかもしれない。しかし，安易に他の学問領域に敷衍すべきではない。また，分厚い大学審答申（平成 10 年 10 月 26 日）が全員に配付され，この答申にもこう書いてある云々といった無批判な説明が何度かあったのには，あまり好ましい印象を受けなかった。ワークショップの内容については，全学でさらに批判的検討を加える必要があるだろう。

継続が大切

言語文化部助教授　奥　聡

非常勤講師を始めた頃，ある先輩に「大学教官は，授業方法の基礎トレーニングを受けていないし，授業運営に関して評価も批判もされないので恐ろしい」といわれた。確かに，多くの場合（私の知る限り），教育方法の改善は各教官の個人的「良心的努力」によってのみなされていると思う。以来，授業運営改善のためのよりよい方法の模索は，常に頭の片隅にある課題であった。今回のＦＤワークショップでの一番の驚きは，北大にすでにこの課題に組織的，体系的に取り組んでいる人たちがいたということだ。入念な準備をされた「仕掛け人」の方々に敬意を表したい。私にとっての主な収穫は，（１）すぐに使える・応用できる基礎的実践的なことがいくつか学

べたこと，(2) いろいろな人たちの意見，提案，批判が聞けたこと（自分にとって「宿題」となった意見もたくさんあった），(3) 学部横断で多くの（素晴らしい，面白い，変わった）人と知り合いになれたこと，そして，(4) ビデオで「学生参加型授業」の例が見られたことだ（学生の力を信じることの大切さをあらためて痛感）。

この企画は，毎年継続しなければ意味がないと思う。各学部で経験者が５人，６人とたまれば，学部・学科ごとにより適したやり方で開催することも可能になると思う。制度上，設備上の改善も急務である（良心的教官が疲弊してしまわないうちに）が，多くの教官の英知や経験談（失敗例も含め）などの情報がもっと自由に行き交う環境になれば，北大の教育環境もまだまだ良くなる余地があると思う。今回，企画または参加した全ての方々に感謝したい。

参加者全員から一言

ワークショップ終了時に行ったアンケートから，参加者の意見を整理してみました。「このワークショップの良かった点・改善すべき点」についてと，「今後１年の間に実施したいこと」に分けて並べました。

（Ⅰ） このワークショップの良かった点・改善すべき点

（1）全体について

***　良かった点　***

・フランクな雰囲気があってよかった。

・様々な考え方がわかり今後の教育活動に生かせると思う。

**他学部の教官との交流

・専門分野を異にする参加者と共に意見交換し，作業を共有できたこと。

・いろんなことを作業することで，いろんな学部の人と知り合えたのがよい。

***　改善すべき点　***

・FD や授業法に関する問題整理の枠組みが当然のもののように設定されていて，その是非を論ずる機会が不十分であること。

・もっと，じっくりと北大での教育点を議論できる時間が欲しかった。

・北大の実践を持ち寄って議論すべき（米国の輸入版は一例の紹介として留める方がよい）。

**設備など

・教室（グループの）が適当でなかった。

・全体ミーティングの部屋がややせまい。

・部屋はできれば２人以下の方がぐっすり眠れる。

・食事がまずかった。

・研修センターではなく，温泉地などでやったらよいのでは。

**時期など

・ワークショップの開催時期を考えてほしい（今の時期は多忙）。

・時期がもう少しゆとりのある時間にして欲しい（午後のはじめなど）。

・２日間は時間的に長い。

**受講者など

・今回のものが教授のみであったら，もっと受講者の枠をひろげるべき。

・女性を２割は入れるべきである。

（2）ワークショップの内容

***　良かった点　***

・計画がよく練られていた。

・良い教材がきちんと準備・提供されていた。

・進行が実にスムーズであった。

・タスクフォースの方々の介入（グループへの）

の仕方がよかった。
・短時間に集中的に行われたこと。
・グループ作業とプレゼンテーションを繰り返す方式。
・医学部の授業の実例を見ることができた。
・様々な授業形態があることを知った。
・授業の在り方について総合的に考えられる時間をもてたこと。
・教育の方法に対する概略を包括的に見ることができた。
・これまでクローズドであったレクチャーの中味を公にし，検討（と広い意味での批判）の対象とした点。
・教授法，評価法について，分科ごとに問題のばらつきと理解の違いが明らかになったこと。
・北大全体の「評価」に対するコンセンサスを知ることができた。
・自分にとって新しい経験をしたこと。
・教育にさいている時間に関する自己矛盾をある程度解決できた。
・学外者の参加を認めて下さったこと。
***　改善すべき点　***
・理解ができていない点がかなりある。
・「教育」に対する評価システムについてのコメントが有っても良かったのでは。
・テーマの設定で「環境」としたのは画一的で結果が重なっていた。個々のテーマを設定すべきだった。
・ディベートや学生参加型の実態を知れたのは良かったが，その必要性はケース・バイ・ケースである。
・WS 作業の授業づくりを重視しては。
・ワークショップの価値の認知度を高める努力がさらに必要。
**作業時間など
・時間が足りない（とくにグループ討論・作業の）。
**タスクフォースへ
・タスクフォースも時間厳守を！
・渡された資料が話されている内容のどこに対応するのか分かりにくいことがままあった。

（II）今後１年の間に実施したいこと

**学部におけるワークショップ
・学部におけるワークショップの実施。
・実際の状態と部局内の力関係を考えるとほとんど実現不可能。やれるだけやってみたい。
**教育目標など
・カリキュラムの内容を見直してみたい。
・学部学科のカリキュラム構成に役立てたい。
**シラバスなど
・シラバスの作成については，この WS での知識を取り入れることは可能かもしれない。
・シラバスの精緻化，充実。
**学生参加型授業
・学生参加型の講義と演習の機会の拡大。
・学生参加型を考えてみたい。
**グループ学習
・講義形式の授業にグループ（学生参加型）学習を取り入れて試してみたい。
**ディベート
・自分の授業にディベートとグループワークを導入したい。
**評価方法
・評価法の改善。
・「評価」を実際の授業に取り入れていきたい。
**その他
・アイスブレーキングの取り入れ。
・大人数講義の中で得られないものを少しでも生かしていきたい。
・学科の同僚との意見の交換と，講義体験を共有し，問題点を確認し，解決の方策を考える。
**希望
・何らかの形で今回のワークショップのレポート（総まとめ）を出してほしい。
・各資料の原典 References を教えてほしい。

全学教育　GENERAL EDUCATION

全学教育委員会開催される

12月11日に第22回（平成10年度第4回）全学教育委員会が開催され，つぎのような議題について話し合われました。

議題 1.　平成11年度全学教育部行事予定表
議題 2.　平成11年度全学教育科目の開講予定
議題 3.　平成11年度全学教育科目のT・A
議題 4.　全学教育委員会規程の一部を改正する規程
議題 5.　全学教育科目責任者に関する要項
議題 6.　全学教育委員会専門委員会要項を廃止する要項
議題 7.　全学教育科目連絡会内規を廃止する内規
議題 8.　全学教育科目に係る「要履修」の取り扱い
議題 9.　全学教育科目実行教育課程表の変更
議題 10.　平成11年度全学教育科目既修得単位の認定
議題 11.　平成11年度新入生オリエンテーション
議題 12.　「学生生活実態調査における学生からの要望」に対する取り扱い
報告事項 1.　定期試験における不正行為
報告事項 2.　追試験の該当事由

議題１，２では，平成11年度全学教育に関わる年間行事予定表（別掲）と各部局等より提出された開講予定が提示され，審議の後これが承認されました。この内，総合講義と一般教育演習については表１をご覧ください。今年度より始った次の企画が来年度も予定されています。総合講義：１学期に総長，部局長数名で担当する「北海道大学の人と学問」，２学期に道内の著名人による「大学と社会」。また議題１に関連して，次のような小委員会での検討経過が説明されました。８月実施の第１学期末試験の日程については，学生，教官双方からの日程変更の要望が多いが，２年次前期終了時点において教授会で進級・学科振り分け等の認定を行う学部が１つでもある限り，この日程を１週間以上遅らせることが困難であること，従って，期末試験時期は，７月末実施の可能性も検討すべきではないかという議論がある。

議題３で，全学教育科目に対するT・A任用の必要数について，小委員会における検討内容とともに説明され，これが承認されました。

小委員会における検討内容を要約すると次の通りになります。

・全学教育科目用のT・A経費の予算額がほぼ安定してきた。これを有効利用するために，この経費の使途は全学に対してその内容を明示し，説明していく必要がある。（全学教育科目についてのT・A経費は，各研究科とは別途に要求しており，平成９年度，10年度の示達率が80％強で確立されてきています。この結果，生じた必要額との差額は各研究科の負担となっています。）
・実験科目について，T・A 任用の基準を明確にする作業を開始した。
・論文指導・一般教育演習におけるT・A任用については，理由書の提出を求めているが，その任用にあったては，実験・実習的性格をもつものを原則とすることが小委員会で確認され，今回よりこの原則で査定している。

議題４から**議題７**は，評議会の下に設けられた全学教育運営体制検討委員会の答申が11月の評議会において了承されたことに伴って，全学教育委員会規程等の改正を行うためのものです。詳細については次回のセンターニュースに掲載します。

議題８は，７月に各学部に行った照会に基づいて，「要履修」科目を廃止することが了承されま

した。さらに，全学教育科目について不履修（無欠）の評価を廃止することについて，各学部（とりわけ進級・学科振り分け要件にこの評価を利用している学部）に検討をお願いしました。また，不履修（無欠）の評価を廃止した場合，現在，実行教育課程表の備考欄において「後期の履修に（直接関連する）前期の科目の履修を前提とする」表示のある科目については，これまでの「履修」の意味が変わります。そこでこの注釈を廃止し，シラバスにおいて学生への指示を徹底することとしました。

議題９では法学部，医学部より提出されたそれぞれの学部の全学教育科目実行教育課程表の変更が了承されました。

議題10，11では，平成11年度の全学教育科目既修得単位の認定と新入生オリエンテーションについて，その日程が提示され承認されました。

議題12では，昨年11月に実施された学生生活実態調査において学生より出された全学教育一般，カリキュラムおよび事務手続き等についての要望について，学生委員会より全学教育委員会に検討状況についての回答依頼が来ていることが報告されました。これについての回答文案を委員長と小委員会で作成することについて諮られ了承されました。

報告事項１では，前回の委員会で諮られた定期試験における不正行為についてその後の処分等が報告されました。

報告事項２では，課外活動に係る追試験の取り扱いについて，前期定期試験において一部混乱が生じましたので，小委員会で検討しました。その結果，今後，課外活動に参加することにより追試験を希望する場合，事前に「追試験願」に授業担当教官の認印を受けた後，共通教育掛に提出することに手続きを変更したことが報告されました。追試験の該当事由については，さらに全学教育科目の再履修科目と学部専門科目の試験日程が重複した場合の取り扱いについて，全学教育委員会として検討する前段階として，各学部において調査・検討をお願いしたいとの要望が出されました。

カット：氏間多伊子

表1.　平成11年度総合講義及び一般養育演習開講数

表２．　平成 11 年度　全学教育部行事予定表

月	日（曜日）	行　　事	備　考
4	6（火） 7（水） 8（木） 9（金） 12（月） 22（木）～　23（金） 23（金） 23（金）～　26（月）	クラス担任代表会議【予定】 新入生オリエンテーション 入学式 学部ガイダンス 第　1　学期授業開始 　2　年次以上履修届受付 追加認定試験成績締切 　1　年次履修届受付	当該学部
5	上旬　～下旬	定期健康診断	
6	3（木） 3（木）～　6（日）	開学記念行事日 大学祭	休講 休講
7	23（金） 26（月）～ 8　月　17（火）	第　1　学期授業終了 夏期休業日	
8	18（水）～20（金） 23（月）～ 9　月　3（金）	補講日 定期試験	
9	7（火）正午 7（火）～　10（金） 10（金）正午 中旬～下旬	定期試験成績提出締切 追試験 追試験成績提出締切 学科等分属手続	当該学部
10	1（金） 14（木）～　15（金） 15（金） 14（木）～　15（金）	第　2　学期授業開始 　1　年次履修届受付 追加認定試験成績締切 　2　年次以上履修届受付	当該学部
11			
12	24（金）～ 1　月　7（金）	冬季休業日	
1	10（月）～　12（水） 15（土）～　16（日） 17（月）	補講日 大学入試センター試験【14（金）休講】 授業再開	
2	4（金） 7（月）～　18（金） 22（火）正午 21（月）～　23（水） 25（金） 28（月）　正午	第　2　学期授業終了 定期試験 定期試験成績提出締切 追試験 北海道大学第　2　次試験（前期日程）【予定】 追試験成績提出締切	
3	12（日） 中旬～下旬	北海道大学第　2　次試験（後期日程）【予定】 学科等分属手続	当該学部

生涯学習　LIFELONG LEARNING

特別シンポジウム
「日本から世界へ― 21 世紀の北海道大学・学生への期待 ―北大 OB 産業界リーダーからのメッセージ―」

11 月 27 日（金）午後，高等教育機能開発総合センター大講義室で，表記の特別シンポジウムが行われました。この企画は，本学の東京同窓会と生涯学習計画研究部が中心となって具体化したもので，学生・大学院生・教職員に広く参加を呼びかけるとともに，卒業生の社会人を講師とした総合講義「大学と社会」の一環としても位置づけられました。

シンポジウムは丹保総長，東京同窓会会長の児島仁氏（NTT相談役・前会長）の挨拶にはじまり，玉置和宏氏（毎日新聞論説委員）の基調報告の後，河野明男氏（日本航空（株）副社長），澤邦彦氏（富士電機（株）社長），園田保男氏（東洋エンジニアリング（株）社長），玉堀為彦氏（東燃（株）社長），松田昌士氏（東日本旅客鉄道（株）社長）ら５人のパネラーから，「これからの職業人として必須の語学力などのコミュニケーション能力の大切さ」，「変化の時代こそしっかりした理念や信条を必要とする」，「社会に開かれた大学をめざした北海道大学のあり方」などについて発言がありました。

その後，参加した学生・院生とのディスカッションの時間となり，会場から「企業と環境問題」「日本が目指すモデルについて」「女子学生と就職問題」など数多くの質問意見が出され，それについて各パネラーが発言し，予定時間を延長して議論が行われました。最後に小林甫（生涯学習計画研究部長）から閉会の挨拶がありました。

卒業生である産業界 OB からの熱いメッセージを在校生はどのように受け止めたか当日の感想のいくつかを以下に掲載します。

＜参加学生の感想＞

法学部のＫさん

今回は経済的側面からのアプローチが多かったせいか，世界を視野に入れた話で非常に面白いと感じました。確かに，これからの国際社会を見れば，世界のグローバル化はさけて通れないことは必至です。国際人として生きていく上で必要な道具が何であるかをはっきり示してくれたと思いました。自分の日本の経済，政治，文化それぞれの分野に対する独自の主張をもち，それを明確に表現することが大切なんだということがよく分かりました。また，日本の大学・社会の甘さをきびしく批判されていました。確かに，大学と社会はあまり密接に関わっていないため，社会の殺伐とした生存競争についていけない新社会人が増えていると思います。もっと社会に開いた大学づくりをしていくべきだと思いました。学生の側も，もっと情報や世界の出来事に対して興味を持つよう意識していかねばならないと思いました。（一部略）

理学部のＴさん

５人のパネリストの話を興味深く聞くことができた。現在の学生に求められている素養，日本のあるべき姿がわかったような気がする。「論理性」「語学」「教養」「コミュニケーション」「説得・交渉力」「リーダーシップ」が５人のパネリストの中からでてきた言葉である。日本の産業界のトップに位置する人たちの言葉だけに説得力があった。今は確実に能力が必要な実力主義の時代になっている。我々学生も昔と同じままで

あってはいけない，いることはできないのだろう。（一部略）

経済学部のＮさん

みなさんのお話を伺って，北海道大学の卒業生の方々が今の日本をどのようにみているかがわかり，自分にとってとても勉強になりました。いま，変革の時を迎えている日本の社会・経済は，日本という国１つだけを見つめても成功するはずもなく，世界の中の他の国々の現在や未来までも見据えた上で，国民が自分たち自身によって変えていくべきである。そして，当然それは若者である私たちの手によってなされるものだと感じました。北海道大学が北海道だけでなく，日本や世界までも変えていける大学になりうる可能性をもつということを再認識しました。（一部略）

センター日誌　CENTER EVENTS, *Oct. - Nov.*

10 月

1 日　・第 10 回大学の開放の在り方に関する研究会（神戸大）
2 日　・第 4 回生涯学習実務者協議会（神戸大）
7 日　・（会議）センター長・部長会議
8 日　・（会議）第 32 回全学教育委員会小委員会
12 日　・教務情報システム視察（弘前大学学生部 1 名）
13 日　・SCS 視察（国立オリンピック記念青少年総合センター 1 名）
19 日　・教務情報システム視察（北海道女子大学 3 名）
・SCS 視察（国立科学博物館 3 名）
22 日　・放送講座（ラジオ）スクーリング（留萌）
22～23日・平成 10 年度国立七大学共通教育主幹部局長会議(本学当番)
28 日　・放送講座（ラジオ）スクーリング（帯広）
29 日　・（会議）第 33 回全学教育委員会小委員会
・「センターニュース」第 20 号発行

11 月

4 日　・（会議）第 35 回センター連絡会議
・（会議）学生・教務関係掛長会議
・放送講座（ラジオ）スクーリング（札幌）
5 日　・（会議）第 34 回全学教育委員会小委員会
5 ～ 6 日・第 20 回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会（宮崎大）
6 日　・放送講座（ラジオ）スクーリング（北見）
12 日　・（会議）第 35 回全学教育委員会小委員会
・放送講座（ラジオ）スクーリング（函館）
・放送講座（ラジオ）スクーリング（留萌）
19 日　・（会議）センター長・部長会議
・（会議）第 36 回全学教育委員会小委員会
・放送講座（ラジオ）スクーリング（旭川）
・放送講座（ラジオ）スクーリング（帯広）
24 日　・（会議）第 14 回高等教育機能開発総合センター予算・施設委員会
25 日　・（会議）臨時全学教育委員会小委員会
・教務情報システム視察（弘前大学学生課 2 名）
26 日　・（会議）第 37 回全学教育委員会小委員会
27 日　・教務情報システム視察（一橋大学学務課 1 名）
・特別シンポジウム：北大 OB 産業界リーダーによる「日本から世界へ― 21 世紀の大学・学生への期待―」
27～28日・北海道大学教育ワークショップ「21 世紀における北大の教育像をめざして」
30 日　・（会議）第 36 回センター連絡会議

カット：氏間多伊子

行事予定　SCHEDULE, *Jan. - Mar.*

	【日（曜日）】	【行事】	【備考】
1月	11 (月)～ 13 (水)	補講日	
	16 (土)～ 17 (日)	大学入試センター試験	
	18 (月)	授業再開	
2月	5 (金)	第2学期授業終了	
	8 (月)～ 19 (金)	定期試験	
	23 (火)正午	定期試験成績提出締切	
	22 (月)・ 23 (火)	追試験	
	25 (木)	北海道大学第2次試験（前期日程）	【予定】
3月	1 (月)正午	追試験成績提出締切	
	12 (金)	北海道大学第2次試験（後期日程）	【予定】
	中旬～下旬	学科等分属手続	当該学部

カット：氏間多伊子

編集後記

大学教師の教育負担をあらわす一つの指標に，学部学生の数（大学院生はふつう含めない）を教師数で割った値，すなわち教師一人あたりの学生数がよく用いられる。国際的にはこの指標が17を切る大学は特別なエリート校とされている。ちなみに，わが北大ではこの指標は5.5であり，講師以上で計算しても8.4にしかならない。数字だけから言えば，北大は超超エリート校の部類に入る。それにもかかわらず，学部教育のための時間がないとこぼす教官が多い。「大学のシステム」か「教育に対する教官の意識」のいずれか（あるいはいずれも）が，国際標準から大きくずれていることになる。（杜）

センターニュース　第21号
(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)
発 行 日：1998年12月25日
発 行 元：北海道大学高等教育機能開発総合センター
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目
電話 (011)716-2111 ・FAX (011)706-7854
編集委員：小笠原正明・西森敏之・◎細川敏幸・
町井輝久・山口佳三
ご意見，お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話： (011)706-2194; FAX (011)706-4922
インターネット ホームページ：http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center